



富山大学教育学部前で、招へい者と富山大学生ら。右端は著者の月僧秀弥氏

現地でも政府や各州が工夫してCBLの教員研修を行うようになりました。こうした中で、大学の教員養成におけるCBLの充実も求められています。そこで、2025年11月7日から14日までの8日間、アジアババ大学(AAU)教育・言語学部学部長の引率の下、大学院生4名、学部生3名の計7名を招き、「初等理科教育におけるCBLの実現に向けて〜日・エチオピア間でのプラットフォームづくり〜」を実施しました。このプログラムは、CBLの実現に向け、日本の小中学校の理科教育の授業実践や教員養成の在り方を実地で学ぶことを目的としています。エチオピア教育省と各州の教育局職員が中心になって取り組むJICA国別研修「初等・中等におけるSTEM(科学)教育の質的向上」と並走し、2チーム合同で理科の模擬授業づくりに取り組みました。

11月8日と9日は大学で導入講義を行いました。日本の教育の現状や教師同士の学び合い、両国の理科教科書・授業の比較、学習指導要領に基づく授業設計、CBLに基づく授業づくり、理科授業デザインの要点など、実験や模擬授業を交えながら富山大学生と共に学びました。オンラインで事前研修をしたとは違い、対面で日本の学生と共に学ぶと、その深まりは全く異なります。中学校で行う形式の理科の模擬授業も受け、日本の教育を学びつつ自国の教育を振り返る機会になりました。富大生ともすぐに意気投合し、休憩時間

エチオピアから招へい
初等理科教育の質向上を目指す

経済発展が著しいエチオピアでは、現在、教育の質向上が求められています。中でも、数学や理科については、授業内容の充実やコンピテンシーベースの教育(CBL)の実現が課題となっています。富山大学教育学部は、2022年より国際協力機構(JICA)やエチオピア連邦教育省と協力して、職員に対する理科教育研修を続けてきました。これまでに、教育省本省や各州教育局職員、大学教員ら45名が来日し、エチオピアで目指す理科教育と一緒に考え、学んできました。研修後は、



月僧 秀弥
(富山大学
学術研究部教育学系
准教授)

富山大学の活動報告

科学技術
振興機構
『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

II 特別連載 II

第478回

プログラムスケジュール	
1日目	日本到着
2日目	富山大学にてオリエンテーション、講義
3日目	富山大学にて講義 富山大生との交流
4日目	附属中学校の授業参観(理科) 理科の模擬授業づくりのサポート
5日目	附属小学校の授業参観(理科・算数) 理科の模擬授業づくりのサポート
6日目	大学の講義の参観 理科の模擬授業づくりのサポート
7日目	大学・大学院の授業参観 模擬授業に生徒役で参加
8日目	成田空港へ移動、出国



教職大学院生(現職教員)との対話



小学校の授業参観(一部加工済み)



模擬授業後、省察を行う招へい者ら

模擬授業後、省察を行う招へい者ら
た。構築の契機が生まれまし
大学との間で新たな連携
AMUと富山
います。今回のプログラム
な機会になったと考えて
来的な機能の上でも重要
ことは、プラットフォーム
修員と共に体験ができた
富大生やJICA研
た。富大生やJICA研
修員と共に体験ができた
ことは、プラットフォーム
の構築のみならず、将
来的な機能の上でも重要
な機会になったと考えて
います。今回のプログラム
AMUと富山
大学との間で新たな連携
構築の契機が生まれまし



理科の模擬授業に生徒役として参加

2026年2月には、
本学の教員や学生がAAU
を訪問し、講演や交流
を行います。学生間で連
絡を取り合いお互いの研
究について相談している
という報告もあります。
日本の学生にとっては英
語を使って教育を語る場
に、AAUの学生にとつ
てはエチオピアと日本の
教育や環境を比較する場
に、それぞれ育ちつつあ
ります。このプログラム
を契機に、二大学間で理
科教育におけるCBLつ
くりに向けたプラットフ
ォーム構築が始まりまし
た。富大生やJICA研
修員と共に体験ができた
ことは、プラットフォーム
の構築のみならず、将
来的な機能の上でも重要
な機会になったと考えて
います。今回のプログラム
AMUと富山
大学との間で新たな連携
構築の契機が生まれまし

には両国の文化の違いを中心に話に花が咲きました。
11月10〜13の各日は、午前中に日本の各学校で授業を参観し、午後はエチオピア教育省職員が取り組む模擬授業づくりへ合流しました。授業参観では、大学附属の中学校を訪し「状態変化」や「電流電圧の測定」についての探究的授業を参観しました。授業では、観察した現象を図やグラフで表現しながら考察する学習に高い関心を示していました。附属小学校では、ICTと地域教材を活用した授業(地学)や児童の思考に沿った授業展開(算数)に、強い関心を示していました。大学では、学部生が行うマイクロビットを用いた電磁石の模擬授業や、動物の分類についての模擬授業を参観しました。教職大学院生(現職教員)との間では、両国の教育について活発な意見交換が行われ、併せて富山の自然や文化・食を学ぶ機会にもなりました。
各日午後には、模擬授業を繰り返しながらJICA研修員が取り組む授業づくりに、生徒役として参加しました。生徒の発言を活か

した授業や多くの実験を取り入れた授業について、どのような発問をすると生徒の発言機会が増えるか、学んだことを活かして多くの意見を発表する姿が見られました。ここで感じたのは若い学生だの柔軟性です。初めて体験した日本式授業だったと思います。初めて体験するといいいのではなにか」と多くのアイデアを述べてくれました。
13日の作成した模擬授業の発表では、日本の学生と協力して実験等を行い、生徒になりきって授業に参加しました。授業後には、日本の理科授業の特徴を踏まえ、これまで学んだことを活かして授業改善の意見を述べることができました。
■成果と今後の展望
研修を通じて、学生がCBLを学ぶ意義をより強く感じることができました。日本の大学生たちも、エチオピアの学生たちと多くの時間を過ごし、これからの学びを考える機会ができました。帰国後も学生同士の交流は続いています。共同研究やさらなる交流拡大へ発展していくことが期待されます。